

日本道

竹葉秀雄

式年遷宮

老松の新芽

(昭和四十七年五月)

昭和四十八年十月には式年遷宮が行われる。この式年遷宮を私は敢て言う、人類の有する最も深遠にして根本的な崇高にして荘厳なる祭、儀式であると。人類は漸次これを了解し、ここに帰するに到るであろう。私の物する数々の書もこのことを明らかにせんための悲願によるものである。

式年遷宮とは我民族の祖神である。「お伊勢さま」のお宮を二十年に一度という定の年を定めて、新しいお宮を造って差し上げお遷りをお願いするお祭りである。神宮司庁総務部長桜井勝之進氏の著「伊勢神宮」の中に、

「何のための造替であろうか。

端的にいうならばそれは宮殿を捧げるためにほかならない。新宮うつりということ自体が目的なのである。

常緑の松は不易の象徴とせられるが、その不老の松もじつは年々歳々新しいみどりを出しては、ひそかに古葉をおとし去って、あの常緑を維持しているのである。新宮は、たとえていえば松のみどりである。この国の悠久の生命を維持してゆくための、みずみずしい松の新芽ともいべき新宮を周期的に造営し、そこに大神の神威の輝きを仰ぐ。この定期的な繰り返しが目的なのである。目的的行為というよりもむしろそれは必然的な生命活動といった方があたるであろう。松の新芽が松自身の生命のたくましい意欲の発現であるように、新宮づくりはこの国自体の根本的な意思表示にほかならない。それは個々の人間の意志や感情ではどうにもならない内在的な生命力の発現として、すなわち天皇の思召によって、くり返されてきた。

神嘗の大まつりとは、もともと新穀をたてまつることにあわせて、弥宜たちが神衣を織ってご正殿に奉納する行事であった。さらには、大神神宮をして和妙衣と荒妙衣とをこの大まつりにさきだつ十四日に奉納せしめられる神衣祭も行われてきた。それだけではない。十五日には瑞々しい榊の枝をもって宮居をとりかこみ、いわば新しい神垣を造成し奉った。

これらをあわせ考えると、大神のための新しい装をつくることは、めぐりくる秋ごとのマツリゴトなのである。ただ、宮殿建築ばかりは規模が大きすぎるために、周期一二か月というわけにはゆかなかつた。中略 新宮造りとはこのように神嘗の大祭の一部なのである。神宮の二十年ごとの遷宮祭は造営遷宮ではなく祭典遷宮という

べきであるといわれる所以である。」(原田敏明先生「祭典遷宮について」)

とある。昭和二十八年の遷宮の際は、敗戦直後であり一個の私法人となり、国家の手から離れた際であって此の度よりもより難儀な事情にあった。私は追放の身であったが、郷里愛媛県北宇和郡の世話をすることになり、日振の島から日吉の山の奥を訪ねてお願いしたのであった。お蔭をもって度会宮(外宮)の遷宮祭に参列を許され、浄間の中の幽玄神厳極りない儀式を体認したのであった。

当時私は「老松の新芽」を書いたのであったが、前掲の一文を見て私の文意と全く同じであるのでこれを借りることにした。

この儀式の意義は深淵である。天照大御神が天孫降臨の際に授けられた「神籬磐境の神勅」「斎鏡の神勅」「斎穂の神勅」がここに具現されているのである。

心御柱と瑞垣

(昭和四十七年六月)

新しい宮居を造って心御柱を建て瑞々しい榊の枝をもってとりかこむことは

ひもろぎいわきか しんちよく
神籬磐境の神勅

「吾は則ち、あまつ神籬及びあまつ盤境を起し樹て、まさに吾孫のために、斎ひまつらん。汝、天兒屋命、太玉命、よろしく、あまつ神籬をたもちて、葦原の中国にあま降りて、また吾孫のために斎ひまつれ。」

の神勅による。これは天孫降臨の際、高皇産靈尊が私達の祖先に授けられたもので、高天原に於いても皇孫のために神籬磐境を樹て、斎ひまつっていられるのであり、中国に於いてもそれと同じく神籬を保って皇孫のために斎ひまつらねばならないのである。

神籬は神霊の籠る木、磐境は潔斎の所で、神宮に於ては宮居が磐境であり、心御柱が神籬である。この心の御柱に神霊のお籠りを願って、天照大御神をお祭りし皇孫の弥栄を斎ひまつるのである。心御柱は見ることも触れることも語ることさえならぬ神聖なものである。とされている。神籬磐境は清浄であらねばならず、自覚は新たにされねばならぬ。式年遷宮のもつ意義である。

斎鏡

(昭和四十七年六月)

伊勢皇太神宮に八咫鏡を斎ひまつることは

さいきょう しんちよく
斎鏡の神勅

此の鏡は専ら我が御魂と為て、我が前を拝くが如伊都岐奉れ。……古事記

吾が児、この宝鏡を視まさんこと、まさに吾を視るが如くすべし。与に床を同じく

し、^{みあらか}殿を共にして、以て^{いわい}斎の^{かがみ}鏡となすべし。……日本書紀

の神勅による。これは天孫降臨の際、天照大御神が皇孫に授けられたるもので、この鏡を視られることは天照大御神と御対面になることであり、そこに写る皇孫の御相は即天照大御神の御相である。皇孫は此宝鏡を視られることによって天照大御神の御神徳にふれ心新たに御稜威を輝かし給うのである。太陽の光と仁慈、更に宇宙の実相を天下に知ろしめ給わんとする使命を日に新たに自覚し給うのである。かくて、

^{あしはら}葦原の^{ちいほ}千五百秋の^{あき}瑞穂国は、これ吾が^{うみのこ}子孫の主たるべき地なり。宣しく^{いましすめみま}爾皇孫、就いて^し治らせ。行矣。^{さきくませ}宝祚の^{あまつつぎ}隆えまさんこと、^{さか}天壤と与に^{あめつち}窮りなかるべし。……日本書紀

の御委託に答え給うのである。つねに宝鏡を視給いて、光と仁慈と結びの神の御精神、宇宙の実相を以て万民に知ろしめし給い教育し給うのである。祭政教一致の道である。この道こそ弥栄の道である。

皇孫のみは御参拝のみでなく、御対面、御親謁なのである。

現在八咫鏡は神風の伊勢に御奉斎しておられるも、必ず内親王を以て祭主とし大神の^{みつえしる}御杖代とし給い、同じ鏡が宮中の賢所に祭られて二鏡一体として御親謁し奉るのである。

同床共殿は心の問題であり、最も尊く斎き祭り、国民齊しく参拝し得てその精神を体得する道を崇神天皇によってひらかれたのである。

稲穂（外宮）

（昭和四十七年六月）

外宮に豊受大御神がお祭りしてあること、神嘗の大まつりは新穀を献ることにあわせて、弥直たちが御衣を織って御正殿に奉納する行事でもあり、さらには、大神宮司が和妙衣と荒妙衣を奉納する神衣祭も行われてきたのは

斎穀の神勅

「吾が高天原に^{きこしめ}所御す^{ゆにわ}斎庭の^{いなほ}穂を以て、また吾が^{まが}児に御せまつるべし。」……日本書紀

の神勅による。稲穂は天照大御神から授ったものであり、青人草大みたからを養うべき尊きものであり、決して精神と分離して軽んずべきものではない。年々の祈年祭、新嘗祭、神嘗祭が如何に大事な行事であるか。また御即位の年の大嘗祭が如何に神巖に行われてきたか。

豊受大御神は食物の神であらせられ、外宮は天照大御神の^{みけ}御食の神としてお祭り申し上げ、公のお宮として皇大神宮に次ぐほどの格を備えていられるのである。

天照大御神も高天原の斎庭において稲穂をお作りになって居られるのであり、天神に奉る神衣を織っていられるのである。

御田始めの儀式は鍬の柄を採取する山口祭^{やまのくちのまつり}、木本祭^{このもと}から始められ、秋の時に至るまで間断もゆるされない齋敬をもってする生産活動、衣を織るのも、家を建てるのも皆それであった。

これがマツリゴトの内容であった。三種の神器とともに稲穂を授けられたことは深淵なる意味がある。天津靈繼と共に天津穂繼の道である。天之御中主神（中、無、空、虚）から天照大御神（日、光、結）の垂統によって生成し授けられた精神と物品である。与に神のみ意^{こころ}であり、神自体である。精神弁証法と唯物弁証法の相互相入円環した生成弁証法である。また終末思想による贖罪哲学のみでなく、それを容れた襖袂による絶対無の生成哲学である。式年遷宮にあたりて、生産と物の意味を深く考え、資本と労働、唯心と唯物の現代の分離闘争の時代を止揚して高次元の思想哲学の黎明を告げる神雞となっていたきたい。

絶対無の自覚

（昭和四十七年八月）

ギリシャのアポロンの神殿もユダヤのエホバの神殿も、その壮大と華麗と威圧を以て、その存在を永久に誇らんとした。

日本の伊勢神宮は、二十年毎に新しくせられる白木と茅葺の宮であり、神路山の自然と調和して鎮まっていられる。

デルフォイの神殿もソロモンの神殿も殆ど廃墟に帰した。神代ながらの神宮は今も新しくそこにある。清浄と尊厳と慈愛をもって。

式年遷宮は最初の山入りから幾百回の祭を重ね齋敬の限りを尽して奉仕せられる。祭^{まつり}は待つ^まつであり、襖袂し純粹絶対の無において待つのである。神ここに格^{いた}り、神の自覚が生じる。

白木と茅葺の神宮は、自然と融合した絶対無の相であり、僅かの黄金の光は清^{きや}けくも厳^{いつく}しき自覚の相である。絶対無は天之御中主神、自覚の光は天照大御神であらせられる。真空妙有、無底の元底と、そこより生じる光明！「寂照神変」の相である。

何ごとのおわしますかは知らねども。と仏道の行者西行もここに涙を流し、近代の歴史学者トインビーもここに絶対的精神的実在を自覚するのである。それは誰からも見らるることなき根元なるものが無限の慈愛をもって見ていられる。誰もが故里のなつかしさを感ずるのである。

生きつゝ死に、死につゝ生きるもの

（昭和四十七年八月）

「その（生きつゝ死に、死につゝ生きる有限者の）死復活を通じて、縦が反復向上的に重積せられるのみならず、さらに横に拡充せられ、微分が積分の創造的要素となるごとく実存協同にまで具体化せられて、復帰即更新的に永遠に参与するのである……これこそ生死を越える浄福というべきものにほかならぬ」と。「絶対無の自覚の哲学」を踏まえて、「懺悔道の哲学」「菩薩道の哲学」を経た田辺哲学は「死復活の哲学」に入った。それは西洋的弁証法的思惟によって、「空」「無」「中」の東洋精神に迫っていったものである。

「絶対無の自覚」が「まつ」「まつる」「まつりごと」であるのに対して、「死の弁証法」は、「まいる」の哲学である。前者が「受動的静」であるのに対して後者は「能動的動」である。自ら敬する人にまいり、また神社に参^{いた}って全自己を投入し、相手の中に自己を帰入（死）せしむるのである。がこれは小我を捨てて大我に生きる所以であり、極して宇宙の實在天照大御神即天之御中主神に格^{いた}るのである。またそれは単なる死と生の春夏秋冬の繰り返しでなく、復帰即更新であり微分が積分の要素となり、積み重ねられてゆく大生命への円環作用である。

式年遷宮はこの死復活の弁証法をも内容とする。二十年毎に復帰更新し、年輪を増しつゝ、漸次實在協同体として拡充せられ、永遠性に参与しながら歡喜をもって大和世界を實現する。

古より大御祖「お伊勢様」にお参りする相を觀よ！「生きつつ死に、死につつ生きる」死復活の宇宙の大実相が示顯されているのである。

實在とロゴス

（昭和四十七年九月）

哲学とはなにか？哲学とは人間（実存）が根源（ロゴス）へ向うたゆみなき運動である。それは実存の根源への復帰でもあり、また根源から実存へ向ってなされる思惟の展開でもある。

右は朝日出版社発行の「実存とロゴス」の表記の一文である。

「汝自らを知れ」とソクラテスが叫んでから二千数百年、西洋哲学は幾多の哲学者によって哲学されたのであるが、それは実存（存在）とロゴス（實在）とについてであった。近世文芸復興以来、人間性の尊厳が主張され、近代にいたって、復活したキリストは大審問官によって問責せられ、「神は死んだ」として超人の理想が説かれ、“神の死”神学の人々が「神なしでやっていく」ことを宣言した。

そのヨーロッパ文化の方向には、権力への意志、断絶の孤独、無限の不安、遊戯的麻醉、懷疑と否定、不信と闘争のニヒリズム的實在主義の究極が写し出されたのである。

神と神との対立のギリシャ神話から生まれた哲学、造物主と被造物との対話からの原罪、

その桎梏から脱出の哲学などは、その人生観からの必然の結果である。

真空実有、無の根源からの光、光からの物、日の神、日継の道、日止(人)日子(彦)白女(姫)の「言」に観る、ロゴスの実存、相対即相待、心と物、内(内宮)と外(外宮)“寂照神変の「ひ」の弁証法哲学”宇宙生命の実相が今こそ明らかにされねばならぬ。

第六十回の式年遷宮において、その意義が世界的思惟によって哲学され展開されねばならぬ。

「ひ」の精神の大白覚

式年遷宮を明年に控えて、去る十月一日、伊勢市の観光文化会館で、神宮大麻頒布始祭にあわせて、神宮大麻全国頒布百年記念式典が盛大に挙行された。

大麻とは伊勢の皇大神宮から授かる神符で、幣を尊んで言うのであるが、古来からの信仰で古くは「お祓さん」とか「お万度さん」と言って尊ばれていたものを、明治五年、明治天皇の御聖慮によって、国民各戸に洩れなく頒たれ、朝夕拝みまつることが出来るように定められたのである。

「お祓さん」の名でもわかるように、その年の罪(積・塞)穢(気枯)を、年の暮に、天照大御神の神符をいただくことによって、祓(張る)霊・霊の充実)して清め、新しき歳を迎えようとするのである。

日本の国が「太陽精神」によって成立し、大御祖を太陽として仰ぎ、その「ひ」の精神を継承することから「日嗣の道」「日嗣の御子」と称し、これに依り添う者を「ひと」「ひこ」「ひめ」と言い、天照坐皇大御神と仰いで伊勢にお祭りし、山の奥島の涯までその地の縁の神と一緒にその御分霊をお祭りし、更にこの「大麻頒布」によって、各戸各人に「ひ」の精神を充実して、罪穢あらしめず、日に新たに日日新たなる生活を営み、仕事に励み、人を慈しみ、太陽の如く無限放射奉仕の道に生きんと願うのである。

「ひ」の精神による素晴らしい有機体的組織造りが自らにして出来ているのである。

式年遷宮も、二十年毎にこの大白覚に甦る意義を有する。六十回目当たる明年の式年遷宮をして「ひ」の精神を世界に知らしめる機たらしめたいものである。

山川木石も依りて祭れる

(昭和四十八年二月)

式年遷宮にさき立ってお白石持の奉仕行事が行われる。これは神宮の神領民が、宮川から選りに選って拾い上げた御白石を奉曳して来て、新殿が出来た外玉垣南御門から参入し

て、内玉垣南御門、蕃垣御門を経て、更に瑞垣御門を潜り、正殿^{まぢか}目近くお白石を奉獻して、北御門から退出する厳かな奉仕の行事である。

この行事は御木曳と共に、各町村を挙げて数日に亘って盛大に厳肅に行われるのであって、いよいよ奉獻の時期が近づくとお白石を神域まで奉曳する車や綱の用意・木遣りの稽古・揃いの衣装の調達・団員一同が二見ガ浦まで襷に行き兩宮へ無事奉仕の祈願をこめる「浜参宮」等々によって身も心も引きしめて奉仕の日を待つのである。

矢野永治氏は「神宮の祭典に奉仕している時、内院のお白石にジッと目をおとすと、石も亦その一つ一つが敬虔な態度で惶こまっているかに見える。否確かに仕え奉っているのだ。」と書かれているが、これらの式年遷宮の行事にこそ、日本古代の「手ぶり」が純粹に伝承されているのである。^{やまのくちのみつり}山口祭に始まって別宮遷宮祭に終るまで、幾百回、誠敬を尽した祭儀と奉仕によってなされる、その相に日本国家の眞実義はある。山川木石も神、それらの神々を祭り、それらの神々がまた依りて祭って仕え兩新宮は生み出されるのである。御稜威はここに輝き、我をして御稜威輝かしめ給えとまた請い願うのである。権威を誇る巨大な神殿、栄華を示す華麗なる宮殿も千載の後唯跡を留めるに過ぎない中に、日本の神宮は純粹に古代のままの造型と行為を伝承しきたっている。この祭祀と奉仕の世界こそ人類究極の大和世界の相であると思われる。(幸にして「ひの会」はお白石持に奉仕するを得るにいたった。)

伊勢の建築

(昭和四十八年三月)

アメリカの建築家アントニオ・レイモンドは、感動をもって云う。

“天地万物のうちに神を把握する力、たとえば、草の片葉にも、折れた縫針の中にも、また青々とした苗代田の上にさえ、神の实在をみとめて、かしこみまつる資性は、例外なしに、天から日本人に賦与された特質なのである。

天地の美と、万物のうちに宿る神を讃仰し謳歌してやまない特性は、これまた例外なしに日本のものである。

ある所に神社があって、それが林間に横たわる一個の岩石にすぎないこともある。この一個の石にこそ、日本人の神における自覚を証明するものがあるではないか。この神における自覚は、祈り、供物を捧げることと一体をなす。

神社の存在が日本人の天地自然の美を讃仰し、謳歌する。いつわりなき感情を何よりも雄弁に証明するものであることは、今さら論をまたない。こうして、神社は景勝の地を占め、神と人はその景をほしいままにし、その美に酔うに至るのである。

伊勢神宮における建築、そこには聖なる価値についての英知と確認とが啓示されている。この英知と確認は、世界のどこの他の宗教建築物にも発見することは出来ないのである。

見よ!! かの伊勢神宮における建築の、森厳きわまりない巨岩と大樹とによる整化されたる完璧さを。人力の限りをつくした構成美を。驚嘆すべき工人たちの技術的精神の粋を。

行きとどいた建築材料の用い方を見よ!! たとえば、大自然の姿そのままに則った、あのうるわしい桧材の用い方を。そして、この桧の材料は、茅と金色のかもし出す美観と結びついて、ここに神明造の典型をこの地上に残すのである。

この神明造の建築こそは、日本人が、そのものの本来具有するところの特質美を、いかに愛惜し、高く評価する民族であるかということ、雄弁に物語るものである。

こうして、伊勢神宮の壮麗にして、典雅なる建築美は、神宮に額づく、もろもろの人々に、絶大なる精神的訓練をほどこしているのである。 ”

と。そして “神道は明快に天地万有の美に参じ、その真理を開顕してやまない世界唯一の宗教であり、その精神的意義は「清浄潔白」であり、もし、人間の心が、清明潔白ならば、天は創造に鏡のように輝き、真理は心に反映してやまないであろう。 ”

と云う。世界的建築家のレイモンド氏がこのように観ている。その伊勢神宮の式年遷宮が今年行われるのである。

三間の里（伊予）のお伊勢踊り

（昭和四十八年五月）

私は幼い頃から、部落（三間町大字宮野下）の氏神である天神様で、お伊勢踊りを踊った。二月入りとか稲祈禱とかまた悪い病気が流行した時など、部落中の家から一人は必ず出てお宮に集まり、お祓を受けた後、太鼓叩きが真中に坐って、その周りに円く一列に並んで、次に掲げているような歌を唱えつつ、右手に扇、左手に御幣を持って、足を出したり引いたりし、拝礼を主とした簡単古朴な踊りを踊った。私はそれを繰り返して踊っている時、よく全身が電気がかかったようにジーンとして、何とも言えぬ恍惚境に入り、涙が溢れてくるのであった。それは靈感とも言うべきものであったのであろう。そして相和してお籠りをするのであった。

お伊勢踊りの歌

- 一．伊勢のよふだ（山田）の神祭り、神祭り、むくりこくり（蒙古、高勾麗）を平げて、神代君代の国々の、千里の末野の人迄も、踊り喜ぶ人はみな歳は千年を保つなり。老若男女おしなべて、ソレ栄え出て栄え栄こふの芽出たさよ。お伊勢踊りを、踊り踊りて慰みみれば、イヤサ国も豊かに八千代も栄える芽出たさよ。
- 二．天の岩戸の神かぐら、神かぐら、月に六度の神楽より、ソレ千宮より、ソレ万宮より、大神楽より、ソレ参り出て参り下向の芽出たさや。お伊勢踊りを、踊り踊りて慰みみれば、イヤサ国も豊かに千代も栄える芽出たさや
- 三．東は関東の奥迄も、奥迄も、老若男女押しなべて ソレ参り出て、参り下向の芽

出たさや 以下二二同ジ

四．南は紀州の御熊野の千里の末野の人迄も、以下三二同ジ

五．西は住吉天王寺、四国筑紫の人迄も、以下同ジ

六．北は越前能登や加賀、越後信濃の人迄も、以下同ジ

七．千早振る 千早振る 御幣に櫛を奉り、心のままにと願ひ上げ、踊りよるこぶ人はみな ソレ歳は千歳を保つなり、以下一ニ同ジ

不思議な靈感であった。ドストエフスキーが「悪霊」の中で書いている、あの神秘的な歓喜もこれに通じるものではあるまいか。私は宇宙の大霊に触れての靈感だと思っている。

この歌にあるように、かつては東西南北全国の人々が、伊勢に心を一つにしてお参りをし、この踊りを踊って皆それぞれ強い弱いの違いはあっても、私が感じたような神霊との感合があり、大和の心に生きたのである。

この式年遷宮の歳を機に、この伊勢踊りを全国的に復活して、日本のすべてが宇宙の大霊に感合し、真の「^{ひと}靈止」となり、日本の国が靈動するよう願うてやまない。

(今も宮野下部落では行われている。その起原は旧く、一時行われた踊る宗教とは勿論、全然異なるものである。)

灰白き鯖壇 (第五十九回式年遷宮奉拝短歌)

神垣の伊勢の宿舎に身を潔め参入の時刻静かに待ちぬ
板張の筵棧敷に着座してかしこく仰ぐ古き神杉
御饌神豊受姫の大神の外宮の社は神佐備てあり
食稻魂稚産霊の化生ませる理^{ことわり}しのび思はず
今の世に開きし科学の験^{たまし}よりいやさら深き惟神の道
子孫に授けたまへる稻垂穂「日嗣ぎ」「穂嗣ぎ」の道あきらけし
「ひこ」「ほほ」と神代の神は名をおひて「日嗣ぎ」「穂嗣ぎ」の道いや嗣ぎに
天照らす「ひ」の大神の外宮と食稻のみ魂を祭る畏さ
神杉の下に座に着く幾千の人の寂けく太古の如くに
数刻を経れども誰も声たてず時は流れて夕闇迫る
残照の高き梢に風起ちぬかつら木の葉か舞ひ落ちきたる
舞ひ落ちる木の葉魂あるごとくにて我が膝の上に舞ひ落ちきたる
舞ひ落ちる木の葉かしこみ手にうけてその外宮に拝を重ぬる
戌の刻ややすぎゆけば瑞垣の門に鶏鳴三声あがりぬ
御勅使御階の下進み出で出御を三声奏せらるごとし

庭の燎^{あかり}みなことごとく消えゆきてただ一色の浄闇となる
先行の宮掌^{くじょう}見えたり秉燭^{へいしよく}は御道を照らす遷宮の儀始まらんとす
御楯御鉾御鞆御弓御翳御太刀御蓋威儀の御物御神宝の列進み行く
浄闇の^{ふかど}深処に生ず韻律か調べ妙なる神楽歌（楽）聞こゆ
警蹕^{けいひつ}の警^{いまし}めに神儀出でたまふ行障^{こうしょう}ほのかゆらめき見ゆる
御神儀を覆ふ行障^{きんがい}絹垣に御蓋さしかけしづしづと行く
松明^{たいまつ}の火^{あかり}の外は浄き闇ほのかに白し絹垣行障
大御神み渡りたまふ今しここ仄かに白き行障の中に
遠き世の^{ゆめまぼろし}夢幻^{ゆめまぼろし}かおぼめけるほのかに白く移らふ御神儀
肅々と神儀進みます遠き世のその幽玄さその森厳さ
神ながら畏き極みにいと小さきこの身この情堪ゆるべしやは
仄白くおぼめき進む行障を拝めばただに涙溢る
浄闇の底より興る幾千のその拍手の靈気のひびき
北白川房子祭主は後陣に奉仕せられて御杖つきたまふ
前陣と対の序列に進みゆく威儀の御物、御火、宮掌
祭主以下二百に近き神官の袂きはめて仕ふ尊さ
高松の宮も同妃と従きたまふ国の最も重き御祭儀
敗戦の後にありせば四歳すぎ民の心で成りし遷宮
なかなか民の心の底深く根ざせることを証かす遷宮
賤の男のわれも召されて浄闇の中にこもりて拝すかしこさ
夢かはた^{うつつ}現^{うつつ}か人のこれの世のいとも神秘的な幽玄の極
この心高天原に相通ひ八百万神の血潮よみがえる
妙なるや澄み上りゆく道楽は遠ざかりゆき新宮に入る
庭燎^{ていりょう}は再び焚かれ目の前に千古神杉幹あらはるる
神宮の東の宮に在す時泰平ときく祈らざらめや

第五十九回式年遷宮に奉賛会の評議員として奉拝を許された。当時を偲び、瑞垣第六十七号に載る高橋城司氏の「昭和両度の式年遷宮の思い出」を資料とさしていただいて歌にあらざる歌なれど自らの記念として作歌。

昔の手振

わが国は神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ（明治四十三年）
開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ（明治四十五年）

すすみたる世にうまれたるうなみにも昔のことをまづをしへなむ（明治四十年）

日本を近代国家に飛躍せしめられた明治天皇御晩年の御宸念のほとばしりである。

我が師はかつて「史上最も偉大なる帝王は、明治天皇。宰相としては元に仕えた湛然居士耶律楚材か。」と話された。

私は湛然居士の百拙禅師に和した。

十万世界これ全身
気宇王の如く比倫に絶す

.....

の詩や、「アルタイ山を過ぐ」の

.....

詩書満載して金山を升起
絃歌やまず松漠を踰ゆ
世上もと真の是非なし
安んぞ知らん今是にして昨非なるを

.....（安岡正篤先生著「東洋思想と人物」の中の哲人宰相湛然居士参照）

の詩句など愛誦しておかないのであるが、彼の乱離の間に湛然としていた心境の底に、なお蒼淵なる悲哀の深さを感じないではいられない。彼は遼の王族で、その滅亡後彼の祖父は金に仕え、更に彼は金を滅した元のジンギスカンに仕えた。意気相許し肝胆相照らしての交わりとはいえ、これは何と言っても人生の悲劇である。彼のように大悟徹底すればするほどその悲しみは深いのではあるまいか。私は彼の詩を誦すれば誦するほどそれを感じるのである。これは中国の運命である。天照大御神の「日嗣ぎの道」立極垂統に倚らざる国と民族の運命である。まことに耶律楚材は、明治天皇と相俟つべき人材であった。有難き哉！ 我等。

宋代の儒者達の学問を最近窺って、よく彼等が彼等の国の根本思想である「中」の世界を窮理哲学して、命・性・道・理・心・気・誠などを論じ、隱微と顕大の無間を説き静・敬の生活を重んじているのを観て、今更ながら日本古来の手振そのままの伊勢神宮の潔斎の生活を改めて尊崇し奉るのである。

忌 火

かしこしや ひの木の臼に 山びはの 杵で火を鑽る 忌火屋御饑炊

忌 水

高光る 天の忍穂井 汲み奉る 神職は水面に 影を落さず

忌 塩

二見の浦 幾千代松に 立つけむり 上代かはらぬ 御塩焼かな

一年を通じての田作の生産活動も、その他の諸行事も、すべて天照大御神によるこんでいただくためであり、日々の祈り、時中の祭り、不断の齋敬の中の生活、一挙手一投足悉

くこれ奉仕の態度である。

宋代哲人達の願った誠敬静和、格物致知の最高至純の生活がここには上代から持続されているのである。

何の咎があろう。ここには、道の論議も各種のイデオロギーも発生せしめる原因もなく、他国に発したこれらの問題も、ここに入り来っては皆それぞれに絶対の次元に止揚せられるのである。

世界は一瞬にして成り、万物相冒さず皆各その性を遂ぐるであろう。

日本の「昔のてぶり」に神習うとき。

新しくて、永遠なるもの

“ヨーロッパからの巡礼者は、彼等の国（ヨーロッパ）の修道士たちの、世俗から離れた聖域の尊厳さの中の奥深きあたりでの祈り、また作業の生活と同じような理念が、およそ二千年の長きにわたって、この伊勢に生きているのをみつけて感動する。五十鈴の清流につらぬかれた太古のままの森、この比類のない美しい自然のなかにこそ、こころ澄まして神に仕うべき世俗からの隔絶があった。

内玉垣に参入し、二拝二拍手、神の前にぬかずく光栄を与えられ、先導の神官の玉石をふむ木履きくつの音に太古の静けさをきいた。皇大神宮、豊受大神宮両社のかたわらに建替え地が設けられ、二十年ごとの遷宮の儀式が、七世紀以来変ることなく、先の戦争にも耐えてすでに五十九回を数えたことは、異邦人にとっても驚異であった。

私は戦争で破壊され、くずれおちた石片を入念に集め、足らざるを新しい素材で補って修復された故国のいくつかの教会を思いうかべた。その国の風土的条件や素材の違いはしばらくおいて、この式年遷宮の儀式に、私は比類のない伊勢の伝統の最も重要な本質をみつけた。神々のための新しき宮居を造営する それは信仰に新しき生命を通わせる象徴ではなからうか。二十年ごとにめぐりくる日に新しく造営され、そのたびに宮柱の基がかためられ、しかもなにひとつ変えられることなく太古の姿をとどめて伝統は永遠に伝えられていく。この特色ある伝統の永遠のくさりこそ、伊勢のもつ神聖と尊厳との、異邦人にたいするこの上ないあかしであった。

必要以上の装飾と色彩を排除した清浄さと素朴さ 異邦人は神宮建築様式の特徴をヨーロッパの何に比較すればよいのであろうか。純粹をあらわす直線の厳しさを、鰹木かつおぎのまるさや主柱のふくらみがやわらげている。そこには尊厳とまどやかさとの共存があった。この世の暁間にも似たみあかしのもとに、ゆるやかに舞い、白く赤く、行きかう巫女みこの手振にも、同様な古式の調和があった。私はこれに低く和す幽玄な楽の音とともに、ひととき魅せられた。“倭舞”の世界を忘れることが出来ない。

……時雨空から時として陽光のさす探訪の一日、私は多くの参拝者の群れ、特にこの国の学童たちの列をみた。この神道の故郷は子供たちのナイーブな魂に清らかな印象を彫りつけるにちがいない。しかし“敬虔なるもの”の最も素朴な胚芽が子供たちの成育とともに、彼らの魂のなかでどのように成長していくのであろうか。

近代日本における信仰の混在、特にこの国の知識人一般にみられる信仰の混迷状況は、ヨーロッパ人にとって理解し難いのである。軽々に発言することをひかえよう。そして次のことを強調するにとどめたい。

この国の民族的な信仰の根源がかくも深遠、清浄である以上、その伝統はなに一つ変えられることなく、しかも新しき血精を得て不断に新しく、永遠に継承されるだろうと信じたい。“（ベルリン大学中世史主任教授ヘルバート・ヘルビック氏の伊勢参拝記、瑞垣より転載）

このキリスト教徒の回国巡礼者は、伊勢神宮の相と式年遷宮の意義と、参拝する学童と日本の知識人一般の信仰の混迷状況を以上のように見ている。“その根源がかくも深遠、清浄である以上、その伝統はなに一つ変えられることなく、しかも新しき血精を得て不断に新しく、永遠に継承されるだろう”と、彼が最後に信じてくれている以上に、私達は信じ、学童の未来と、一般人の信仰に責任をもち今度の式年遷宮にあたって真に自覚し、民族に自覚させ、訪ねくる異邦の巡礼者に絶対的感動を与えたいと念ずるのである。

寂照神变

空海は大日経を最高のものとして大日如来を本尊とした。傳教は法華経を大円経として一念三千の諸法実相と久遠常住不滅の仏を見た。この経の劫初の仏は日月照明如来であり、次々に現れる仏も同名である。法然・親鸞は尽十万無碍光如来の阿弥陀の無量寿・無量光に帰命し、道元は座禅によって寂無に帰し、仏に投入れ、仏より来る受用三昧を説いた。日蓮は海より登る日輪に靈感し「南無妙法蓮華経」の大音声を上げて日蓮と名乗り、弟子達にも“日”の字を冠した。顕密自他力のいずれにあっても、宇宙遍満の毘盧遮那仏と遍照光明の盧遮那仏を拝するのである。

孔子は未発の中と明明徳を、孟子は良知を、老荘は玄・虚・無を説いた。

現代物理学は宇宙エネルギーの波動が高まって光子エネルギーに化するを発見し、西洋哲学も唯心・唯物を経て、創造弁証法から“光の哲学”に入らんとしている。

寂照神变

太古のままの高倉山と神路山の森の上に、しのめ色にきらめく千木と鯉木を見る。河鹿の声、小禽の囀を聞きつつ森深く入ると、千古の神杉の間に、それと同じ様に桧の素木の柱が突っ立ち、板垣があり、青い榊が掛かり、茅葺の屋根。森の神聖がそこに社し鎮ま

ってられるのかと怪しまれる。額も彫も像も一つもない、素にして樸、虚にして閑、清にして明、直くして正、厳にして肅、温にしてなつかしい御社が寂として鎮っている。その屋根に円い鯉木は重き落ちつきを示し、千木の直は高く天を指し示している。しのめ色の金色の輝きをもって。

私がかつて靈感した富士山上虚空に現じた天照大御神のみ名の色はしのめのこのきらめきであった。

寂たる天之御中主神の神霊いよゝ清まり高まって照たる天照大御神生れ給い、その一系の日嗣の道にひと（ひこ・ひめ）は寄りまつる。これ立極垂統である。

産霊は何処の地にも在します。山の奥、島の涯に産土・氏の神は祀られ、それらを統べ給うのが外宮の豊受大御神であり、これら産土の社には、また内宮の天照大御神の“日”の御分霊と一緒に祀られている。私等の祖先は天津神のみことのりをもって、三種の神器（鏡は吾を見るが如くせよと、）と稲穂とが授けられたのである。ひ嗣の道と穂嗣の道である。内宮・外宮は心物の相対にして祭られ相待にして一つとなって祭られている伊勢神宮である。これは幽の祭である。日嗣の道がひとに及び、ひとが日嗣の道を開広するのは顕の政（祭りごと）である。幽顕分れず、物心争わず、重々無尽の天網の如き相を産んでいるのが日の本である。

寂（虚）なるが故にすべては川流しきたりて相戻らず、照（光）なるが故にすべてを発育せしむ。立極垂統なるが故に天地位し万物所を得て相冒さず、個人と民族の花、互に映え合うて匂い輝く大和の交響楽が鳴りわたるのである。

寂照神変の森、伊勢神宮！

息づける森

三時半所定の棧敷の席に着いた。幸い東御社の南板垣御門の前で、此の前の御遷宮にこの御門に入御されるのを見送ったその御門の前で、今度はその御門から出御されるのを迎えすることになる。

鶯が声高く叫んでいる。見上げると老杉の梢の先に一羽の鶯が止まり、一羽は老杉の林の繁みの中から見える白い雨雲の空を悠々と舞っている。「鶯飛んで天に戻り、魚淵に躍る。其の上下に察あきらかなるを言ふなり。」の中庸の詞が浮ぶ。そうだ、ここでこそである。

御社の幾倍あろうか、その高い高い老杉の二本の太い幹の間に外宮の御門は、全くその老杉の姿と一つになって鎮ってられる。

五時半頃、危ぶんでいた雨がポタリポタリ落ちはじめた。杉の葉に降った雨の雫であろう。人々は少しざわめき、蝙蝠傘を拡げ、ビニールをかぶり、木蔭に移る人もある。神宮司庁からビニールの雨具が渡された。

六時、太鼓が三つ打たれた。私はそのすべてを純粹に感得すべく鎮魂の姿に整えた。齋館から勅使、鷹司和子祭主、常陸宮、百数十名の神官、特別奉拝の人々が次々に歩み出て南板垣御門の中に消えてゆかれる。これらの人々を容れた社内はまた御門の帳が降されて寂としている。内では厳粛な行事の祭が行われていることだろう。

雨は何時の間にか止んでいる。「農業の神様だから雨を一寸降らされたのでしょうか。」と隣の人言う。その通りである。八月のお白石持奉仕のときも、朝までの大雨がやんだのであった。

八時（酉とりの刻）一斉に神苑の燈は消された。ただ旧御社の前と、新御社の前に篝火が素衣の宮掌によってつつまじやかに焚かれているのみである。正殿の階の下では鷄鳴三声が時を告げ、勅使が出御をお願いしていただけることであろう。天の岩戸開きである。暫くすると板垣御門の帳にほの赤き明りが見え、帳が揚げられて長い松明を持った宮掌が行列の人々の足もとを照らすように出てくる。松明は弾けて火の粉が散る。浄闇の中に鮮やかである。御楯、御鉾、御鞆、御弓、御翳、御太刀などの御物、御神宝を捧げ持った列がつづく。その歩みである。一呼吸に一歩と思われるほど徐々である。和琴と筆ひちりきと笛の音が聞える。浄闇の彼方から太古のいにしえから、声なき声の細く静かにひびいてくる。これも人の呼吸のように、徐々に高く、また徐々に低く、やがて浄闇の中に消えてゆき、またおきてくる。それに合せて道楽の神楽歌が聞える。これもただ声の強弱のみで言葉はわからない。人々も品物も、色は勿論、形もさだかだけでなく、その道楽の神楽歌の音律につれて、影のように、歩むともなく歩んで、ゆらめき移って行く。

仄白く大きく長いものが、今御門をおぼめきながら出てくる。御神儀である。御神儀を蔽い困こうしょうきんがんだ行障絹垣である。今大御神は移り給う。太古の寂けさの中に、音もなく、浄闇の中を、動くともなく移りゆき給う。森の呼吸を微塵も乱すことなく。その呼吸と一つになって、静寂の極みの呼吸である。その隠微なるあるかなきかの呼吸に合せると、その呼吸は遠き太古からの呼吸である。また、天地の底の深みからの呼吸である。「その大を語れば、天下能く載する莫く、その小を語れば能く破する莫き」その呼吸である。些かの乱れもなく絶間なき永き呼吸である。今この森は、大和島根は、全地球は、この御神儀の息づかいと与に息づいている。確かである。私は鎮魂の極みの純粹さをもってそれを現実に感得した。神は息づき給う。生命であらせられる。「惟れ精、惟れ一、允に厥の中を執れ。」と謂う。その精と一とは、この隠微なる呼吸によってのことである。厥の中とは、この誠敬の極の世界である。あのお白石持ちの際、許されて齋庭に立って仰いだ、あの清明にして莊嚴、粲然として幽玄、底つ磐根に太敷立つ桧の素木の掘立と茅の屋根の素朴さ。それを押える円き堅魚木の重厚さと遙かに高天原を指す鋭き直の千木に輝く金色の華麗との調和美の窮まりの白賁の社殿は、人に仰がず為でもなく、太古の森の奥深く、大御神に鎮まっていたたく為のものであり、これの粋を尽した神宝御物も人に鑑賞せしめる美術品として人に誇る為のもでもなく、ただ大御神の装い調度品として社殿の内に置かれるものである。すべては敬の心からである。今、ここで行われている宮遷りもまた世の人に観せる

行列ではない。平安朝の麗しい装をせられた鷹司和子祭主も、見別け難い浄闇の中で影のように移りゆれているのである。ただ誠敬の至りをもってのことである。

この敬の極まりこそ、隱微精一の極まりであり、厥の中を執る所以である。故にこそ、「隠れたるより見はるゝはなく、微かなるより顕かなるはなし」であり、「発して皆節に中^{あた}る」のであり、「中なる者は天下の大本、和なる者は天下の達道、中和を致して、天地位し、万物育つ」のである。顕微一本無間である。その「睹ざる所を戒慎し、聞かざる所を恐懼し、其の独りを慎しむ」よりして、肫肫たる其の仁、淵淵たる其の淵、浩浩たる其の天、その聡明聖地天徳に達するのである。費にして陰なる道である。精微を尽して広大を致すのである。敬こそはその精微を尽す心である。その敬の極の、中のなかに、虚の本体中に、すべての理は存し、気は充実して、万物は並び育てられて相害われず、道並び行われて相悖らず、小徳は川流し、大徳は敦化する、その大用が秘められているのである。

故にこそ、その社殿も、神宝御物も、純として純なる神代ながらのものの中に、朝鮮、支那、印度、中央アジア、最近は西欧のものまで撰取して、これを融化し、調和して、本来のものを愈愈本来のものたらしめて、相害わず、相侵さしめず、大和の世界を生成しているのである。この敬の極まりである隱微なるこの呼吸によって、今この森は確かに息づいている。

御神儀はみ移り給うて、今新御社の前に焚かれている篝火に仄赤く照されながら、西の新南板垣御門に入御せられんとしている。神楽歌は、もう新社殿の奥深くかすかに響く。感動が全身を走る。涙が溢れる。隣の人も、前の人も、皆頭を垂れ、目頭を拭いている。拍手はまた一しきり、浄闇の^{ひかど}深処のしじまから湧き上るように鳴る。

敬こそは、天のみ光が人に発しているものではないか。天の忍穂井に影を落さず、水を汲み、二見の浦の真潮に神代ながら塩を焼き、ひの木の臼に山びわの杵に浄らかな火を鑽って、蒸した御飯^{みけ}を朝夕に差し上げることから、すべては潔斎と祭と奉仕の生活が、この太古の森の奥深く人知らずに日常に行われているのである。至極の敬心をもって。そして、二十年目毎の式年遷宮が八ヶ月をかけ、山に入る山口祭から、最近行われた斎庭に敷きまつるお白石行事にいたるまで、一事一物を誠敬の限りをもって祭し、今ここに、それらが凝集凝結されて誠・中・敬の至極の隱微なる呼吸が息づいているのである。是の如き者は、見えずして章われ、動かずして変じ、為すなくして成る至極の道である。其の物為るや式ならずして、則ち其の物を生ずるや測られない、費にして隱なる道である。

敬止と謂う。敬は至善の「中」に止まることである。故に、人の君と為りては仁に止まり、人臣と為りては敬に止まり、人の子と為りては孝に止まり、人の父と為りては慈に止まり、国人と交わりては信に止まる。緑竹猗猗たる斐たる君子と為り得るのである。

天之御中主神の大生命の「中」に、天照大御神、豊受大御神、其他の神々と、人^{ひと}とが一体となり融和して、今、この森はみなと与に息づいているのである。

九時半退出した私は、神宮さし廻しのバスに乗って、秋づく鳥羽の山の中腹の扇芳閣に、鳥羽の入江の燈火りを眺めながら、無限の思いに、独り直会の御酒^{みき}を酌んだのである。

